

F8-01

不登校の未然防止に関する調査研究

—中学校入学前後の予期不安，リアリティショックに焦点を当てて—

研究の概要

本研究では，中学校入学前後の予期不安，リアリティショックの具体と学校適応感との関連を分析し，小・中学校間の接続時の課題と不登校の未然防止に有効な支援を探った。その結果，学習及び人間関係に関することが多くの児童生徒に課題となっており，予期不安を軽減し期待を大きくすること及びリアリティショックの解消を適切に行うことができるようにすることが支援のポイントであると分かった。この支援のポイントを基に，中学校第1学年時に新たな不登校生徒を生まないための実践プログラムの提案を行った。

キーワード

不登校の未然防止，小・中学校間の接続，予期不安，リアリティショック，学校適応感，レジリエンス

目 次	
I はじめに.....1	5 聞き取り調査の結果.....12
II 研究の目的.....2	6 質問紙調査全体を通して見えてきたこと.....14
III 研究の内容.....2	IV 中学校第1学年時に新たな不登校生徒を生まないための実践プログラムの提案.....14
1 質問紙調査について.....2	1 対象とする項目について.....14
2 予期不安，リアリティショック及び学校適応感の調査結果.....5	2 支援について.....16
3 予期不安，リアリティショック及び学校適応感（5月）の関連の分析.....9	3 実践プログラムの提案.....17
4 学校適応感（9月），リアリティショック及びレジリエンスの関連の分析.....10	V おわりに.....18

岡山県総合教育センター

生徒指導部長	野崎 誠 二
指導主事	田坂 紀子
指導主事	岡本 邦尚
指導主事	塚崎 智代美
指導主事（主幹）	赤木 陽一郎
指導主事（主任）	松末 昌樹

不登校の未然防止に関する調査研究

—中学校入学前後の予期不安，リアリティショックに焦点を当てて—

目的

中学校入学前後の予期不安*1，リアリティショック*2の調査を行い，小・中学校間の接続時における児童生徒の課題を明らかにし，中学校第1学年時の不登校の未然防止に有効な支援を探り，実践プログラムとして提案する。

- *1 小学校第6学年児童が中学校進学前に抱く不安
- *2 中学校第1学年生徒が中学校入学後に感じる驚きや戸惑い

内容

質問紙調査の実施

小6 3月 予期不安

中1 5月 リアリティショック

中1 5月 学校適応感

中1 9月 レジリエンス*3

中1 9月 学校適応感

- *3 困難に打ち勝つ力，困難から立ち上がる力

予期不安，リアリティショックの具体を把握

各調査結果の関連を分析する

小・中学校間の接続時における児童生徒の課題を明らかにする

中学校進学前

予期不安の大きいもの
勉強，友達，先輩，いじめ

中学校入学後

リアリティショックの解消が難しいもの
いじめ，テスト・成績，多忙・疲れ，先輩

中学校第1学年時における不登校の
未然防止に有効な支援の検討

成果

不登校を未然に防ぐための支援のポイント

- ・ 予期不安を軽減し，期待を大きくもつことができるようにすること
- ・ リアリティショックの解消を適切に行うことができるようにすること

実践プログラム「中学校生活をスムーズに始めるためのプログラム」の提案

小学校第6学年（1月～3月）

予期不安を軽減し，期待を大きくもつことができるようにする

- ・ 中学校のイメージをもつことができるようにする
- ・ 中学校生活への期待や不安を話す場をつくる
- ・ 自分の気持ちを上手に伝えるスキルを身に付けることができるようにする
- ・ 既習の学習内容の定着を図ることができるようにする

中学校第1学年（4月，5月）

リアリティショックを適切に解消できるようにする

- ・ 中学校生活への見通しをもつことができるようにする
- ・ 問題解決のスキルを学び，集団生活でのトラブルに対処できるようにする
- ・ 入学後の驚きや戸惑いを上級生や友達と語り合うことで，対処法を知り安心感を高める
- ・ 学習習慣を振り返り，学習面での課題を解決することができるようにする

保護者が子どもを支えるための取り組みを進める

不登校の未然防止に関する調査研究

—中学校入学前後の予期不安，リアリティショックに焦点を当てて—

I はじめに

平成23年度の岡山県の不登校（病気や経済的理由などを除いた，年間30日以上長期欠席者）児童生徒の出現率は，小学校0.55%（全国0.33%），中学校2.92%（全国2.64%）と，小・中学校ともに全国の出現率よりも高い状況であった¹⁾。小学校の人数，出現率は増加傾向にあり，特に出現率は2年連続で全国で最も高くなっている。また，中学校の出現率は平成22年度よりは低下したものの，全国の出現率よりは依然として高い状況が続いている（表1）。

表1 校種別不登校児童生徒数，出現率

		不登校(人)	出現率 (%)	
			岡山県	全国
小学校	平成21年度	528	0.47	0.32
	平成22年度	570	0.52	0.32
	平成23年度	599	0.55	0.33
中学校	平成21年度	1,743	3.06	2.77
	平成22年度	1,771	3.11	2.73
	平成23年度	1,681	2.92	2.64

※ 児童生徒数は，国立・公立・私立の合計

※ 出現率は，不登校児童生徒数÷在籍児童生徒数×100

表2は，平成22年度と平成23年度の岡山県の学年別不登校児童生徒数，平成22年度から平成23年度への進学による増加数及び増加倍率である。

いずれの学年も進級・進学によって不登校児童生徒数が増えており，特に中学校進学時において急増している。増加倍率を見ると，小学校第1学年から小学校第2学年（2.03倍），小学校第6学年から中学校第1学年（2.01倍）が高いことが分かる。

表2 学年別不登校児童生徒数，増加数及び増加倍率（岡山県内 公立）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
平成23年度不登校児童生徒数(人)	27	59	77	95	152	187	364	572	697
平成22年度不登校児童生徒数(人)	29	46	73	86	150	181	374	638	678
増加数(H22→H23)(人)		30	31	22	66	37	183	198	59
増加倍率(H22→H23)		2.03	1.67	1.30	1.77	1.25	2.01	1.53	1.09

※ 増加倍率は，平成23年度の不登校児童生徒数÷平成22年度の該当学年の不登校児童生徒数

表3は，平成23年度の岡山県の児童生徒の不登校の状況であるが，新たに（又は再び）不登校になった児童生徒数の割合は，小学校第2学年（74.6%）が最も高く，次に小学校第4学年（64.2%），中学校第1学年（64.0%）が高いことが分かる。これらのことから，岡山県における不登校は，小学校第2学年，小学校第4学年及び中学校第1学年に関わる課題が大きいといえる。この三つの学年の中でも特に中学校第1学年では，いわゆる中1ギャップといわれるように，そこに大きな課題があることがこれまでも先行研究等で指摘されてきた²⁾。岡山県ではこれまでもその課題を解消するために，小学校から中学校への進学に向けて学校独自の取り組みだけでなく，小中連携などによるスムーズな接続の工夫が模索されてきたが，まだ十分な成果に結び付いていないのが現状である。

表3 児童生徒の不登校の状況（岡山県内 公立）

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
平成23年度不登校児童生徒数(人)	59	77	95	152	187	364	572	697
うち平成22年度から継続(人)	15	31	34	61	104	131	314	486
うち新たに（又は再び）不登校(人)	44	46	61	91	83	233	258	211
うち新たに（又は再び）不登校の割合(%)	74.6	59.7	64.2	59.9	44.4	64.0	45.1	30.3

※ 新たに（又は再び）不登校の割合は，新たに（又は再び）不登校数÷不登校児童生徒数×100

そこで、小・中学校間の接続時に児童生徒にとって課題となることは一体何であるのかを明らかにする必要があると考えた。平成23年5月、岡山県の公立小学校生徒指導担当者（225人）と公立中学校生徒指導主事（97人）に中学校進学時における児童生徒の課題について質問紙調査を行ったところ、中学校教師は「新たな人間関係を構築できないこと」などの対人関係形成力を挙げる回答が多かった。一方、小学校教師は「学級担任制から教科担任制への移行」などの環境変化や「教師の関わりが小学校より希薄になること」などの教師の生徒への関わり方を挙げる回答が多く、課題の捉え方に小学校教師と中学校教師で違いがあった。このことから、小・中学校間の接続時に児童生徒にとって課題となることを明らかにするためには、中学校進学前に何に不安を感じ、中学校入学後に何に戸惑ったり驚いたりしているのかを、直接児童生徒から確かめることが必要であると考えた。

以上のことから、本研究では、小・中学校間の接続時に児童生徒にとって課題となることを、直接児童生徒から聞き取ることにより明らかにし、小・中学校間の接続時における不登校の未然防止に有効な支援を探り、実践プログラムとして提案することにした。その際、小学校第6学年児童が中学校進学前に中学校生活について抱く不安を「予期不安」として、中学校第1学年生徒が中学校入学後に感じる驚きや戸惑いを「リアリティショック」として扱うことにする。また、本研究で提案しようとする小・中学校間の接続時における不登校未然防止のための支援の方向性は、児童生徒が乗り越えるべき困難を取り除くのではなく、児童生徒が自分で困難に打ち勝つ力を育てることにある。阪根（2009）は、困難に打ち勝つ力、困難から立ち上がる力（いわゆる「回復力」のこと）を「レジリエンス」としている³⁾。そこで本研究ではレジリエンスに着目し、中学校入学後の困難を乗り越えることができた生徒のレジリエンスについて調査する。レジリエンスの高さが中学校入学後の困難を乗り越えるのに寄与するという関係が成り立つならば、レジリエンスの育成を目指した支援を小・中学校間の接続時における不登校の未然防止のための支援として提案したい。

II 研究の目的

中学校入学前後の予期不安、リアリティショックの調査を行い、小・中学校間の接続時における児童生徒の課題を明らかにし、中学校第1学年時の不登校の未然防止に有効な支援を探り、実践プログラムとして提案する。

III 研究の内容

1 質問紙調査について

小・中学校間の接続時の課題を明らかにするために、小学校第6学年児童と中学校第1学年生徒に質問紙調査を行った。表4は調査時期、調査内容及び調査対象学年である。

(1) 予期不安に関する調査について

ア 調査の内容

リアリティショックとの関連を探るため、小学校第6学年児童に予期不安の具体及び期待や不安の大きさを調査する。予期不安の具体については、児童の思いを自由に表現できるように自由記述式で調査し、期待や不安の大きさについては3件法で尋ねる。

イ 調査の対象

今回の研究では、小学校から中学校への進学前後を追跡調査するため、調査対象は岡山県内の同一公立中学校区内の小学校とした。事前に公立中学校生徒指導主事に行った中学校入学時における生徒の課題についての質問紙調査では、「新たな人間関係を構築できないこと」という回答が最も多かったことから、複数の小学校から進学する中学校区の小学校を調査対象校に考えた。児童数や地域性を考え、3中学校区10小学校を選定し、調査を依頼した。

ウ 調査の実施

平成24年3月に実施した。具体的な調査日時については、各校の実情に合わせて行った。平成24年3月末を返却期限とし、返却期限までに調査対象校の第6学年児童359人から回答があった。調査対象校への質問紙の配付数、回答数及び回収率は表5のとおりである。

表4 調査時期と調査内容及び調査対象学年

調査時期	調査内容（調査対象学年）
平成23年10月	リアリティショックに関する予備調査（中1）
平成24年3月	予期不安に関する調査（小6）
平成24年5月	リアリティショックに関する調査（中1） 学校適応感に関する調査（中1）
平成24年9月	レジリエンスに関する調査（中1） 学校適応感に関する調査（中1）
平成24年11月	聞き取り調査（中1）

表5 質問紙の配付数、回答数及び回収率

調査対象校		配付数（枚）	回答数（枚）	回収率（%）
A 中学校区	a1小学校	56	55	98.2
	a2小学校	49	48	98.0
	a3小学校	31	31	100.0
	a4小学校	23	23	100.0
B 中学校区	b1小学校	76	73	96.1
	b2小学校	56	43	76.8
	b3小学校	17	17	100.0
C 中学校区	c1小学校	49	49	100.0
	c2小学校	12	12	100.0
	c3小学校	8	8	100.0
合計		377	359	95.2

(2) リアリティショックに関する調査、学校適応感に関する調査及びレジリエンスに関する調査について

ア 調査の内容

リアリティショックに関する調査では、予期不安との共通点及び相違点を明らかにするために、リアリティショックの具体とその解消方法や解消結果を調査する。調査に当たっては前年度に行ったリアリティショックに関する予備調査を評価分析システム「TRUSTIA[®]」⁷⁾を用いて類似した内容をまとめた上で、予期不安に関する調査の回答を参考にしながら、10項目30変数の質問項目からなる質問紙を作成した（表6）。また、学校適応感に関する調査では、リアリティショックの解消方法及び解消結果との関連やレジリエンスとの関連を確認するために、栗原・井上（2011）の学校適応感尺度「アセス」⁴⁾を使用して調査する。さらに、レジリエンスに関する調査では9月の学校適応感との関連を確認するために、大石・岡本（2009）のレジリエンス尺度⁵⁾を使用して調査する。

イ 調査の対象

予期不安との関連を探るため、平成24年3月に予期不安に関する調査を実施した児童の進学先中学校を調査対象校とした。また、リアリティショックに関する予備調査でリアリティショックの具体として新しい人間関係に関する戸惑いが挙げられていたため、複数の小学校が学区内にある中学校を新たに1校加え、4中学校を対象にした。なお、調査対象校の選定に当たっては、生徒数や地域性を考慮した。

表6 リアリティショックに関する質問紙調査の項目

入学後に感じたリアリティショックの内容	
項目	内容
I 授業	教科によって先生が変わること 小学校のときにはなかった新しい教科が増えたこと 勉強が難しくなったこと（覚えることが増えたこと） 授業のスピードが速く、一度に習う量が多いこと 小学校のときと授業の進め方が違うこと（板書の仕方など） 宿題が教科ごとに出されること（量が多い、分かりにくい）
II テスト・成績	小学校のときより、成績の結果がはっきり表されること テストが一度にたくさんあること（テスト範囲が広いこと） テストが難しいこと（小学校のときほど点数がとれないこと）
III 多忙・疲れ	休み時間が短くなったこと 通学距離が長くなり、通学に時間がかかること 部活動の朝練習で、早起きしなければならないこと ^{*注} 部活動で、帰宅時刻が遅くなること 勉強や部活動などで忙しく、ゆっくり休めないこと
IV 部活動	部活動を続けること
V 友達	友達と良い関係でいること 新しく友達をつくること（違う小学校出身の人と友達になること） 仲の良い友達とクラスが別になったこと 新しいクラスに慣れること
VI 先輩	先輩との上下関係が厳しいこと 先輩に敬語を使わなければならないこと 先輩に怖い人がいること
VII 規則	決まりやルールが厳しいこと
VIII 先生	小学校のときより、先生が厳しいこと（先生が怖いこと）
IX いじめ	いじめのようなことが起こること 自分がいじめられること
X 生活環境	学校規模が大きくなり、生徒数やクラス数が多いこと 教室移動が多いこと 授業時間が5分延びて、50分授業になったこと 通学方法が変わったこと

*注 部活動の朝練習がない場合は記入不要

ウ 調査の実施

平成24年5月と9月に実施した（表4）。具体的な調査日時については、各校の実情に合わせて設定した。平成24年5月に実施した調査は、6月上旬までに調査対象校の第1学年生徒484人から回答があった。また、平成24年9月に実施した調査は、9月下旬までに調査対象校の第1学年生徒466人から回答があった。質問紙の配付数、回答数及び回収率は、表7のとおりである。

(3) 聞き取り調査について

ア 調査の内容

リアリティショックの経験が多い又は5月の学校適応感が低い生徒の中で、9月に学校適応感が高かった生徒にその要因を探るための聞き取り調査を行う。

表7 質問紙の配付数，回答数及び回収率

調査対象校	配付数 (枚)	5月回答数 (枚)	5月回収率 (%)	9月回答数 (枚)	9月回収率 (%)
A中学校	159	151	95.0	150	94.3
B中学校	126	122	96.8	119	94.4
C中学校	70	70	100.0	56	80.0
D中学校	156	141	90.4	141	90.4
合計	511	484	94.7	466	91.2

イ 調査の対象

リアリティショックの経験が多い又は5月の学校適応感が低い生徒の中で，9月の学校適応感が高かった生徒（16人）を調査対象とした。

ウ 調査の実施

平成24年11月に実施した。具体的な調査日時については，各校の実情に合わせて設定した。また，聞き取りは対象生徒の各学校で学級担任等が実施した。

2 予期不安，リアリティショック及び学校適応感の調査結果

(1) 予期不安に関する調査の結果

予期不安の具体について，自由記述の内容をカード式発想法を用いて分類すると，16項目に分けることができた。回答率が高かったものから項目別に並べると図1のようになる。図1か

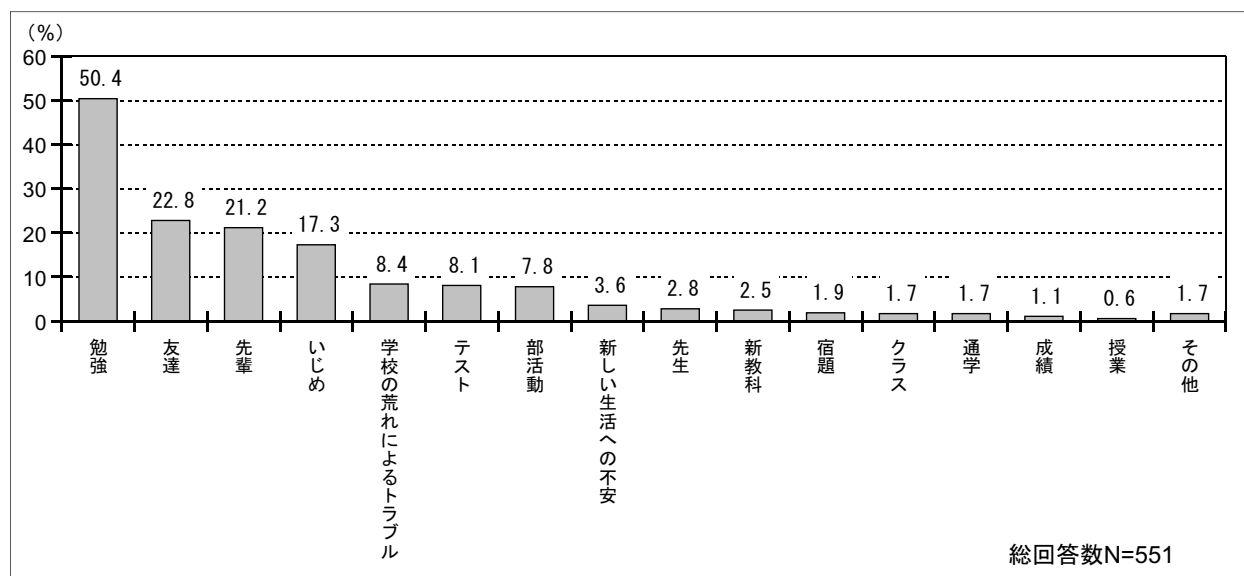


図1 予期不安の具体（複数回答）

ら「勉強」に関する不安が多く，続いて「友達」「先輩」「いじめ」といった人間関係に関する不安が多いことが分かった。一方，事前に公立小学校生徒指導担当者を対象に行った中学校進学時における児童の課題についての質問紙調査では，「学級担任制から教科担任制への移行」などの環境変化や，「教師の関わりが小学校より希薄になること」などの教師の生徒への関わり方を挙げる回答が多かった。これらのことから，児童は小学校教師の考えと異なり勉強に対する不安や「友達」「先輩」「いじめ」といった人間関係に対する不安を抱いていることが分かった。

また，期待や不安の大きさについての問いには，「期待の方が大きい」又は「不安の方が大き

い」と回答した児童はそれぞれ約2割という結果であったのに対し、約6割の児童が「半分ずつ」と回答した（図2）。中学校進学を控えて、期待と不安が入り交じっている児童が多いことがうかがえた。

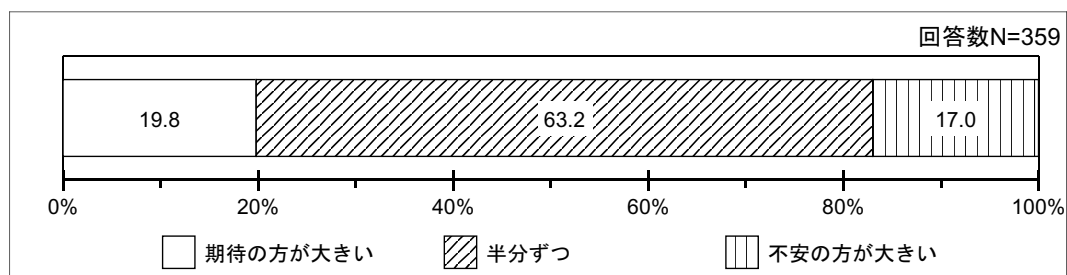


図2 期待や不安の大きさ

(2) リアリティショックに関する調査の結果

リアリティショックの経験（「あった」「時々あった」と回答した割合）が多い項目から順に並べると、図3のようになり、「テスト・成績」「授業」といった勉強に関することが上位を占

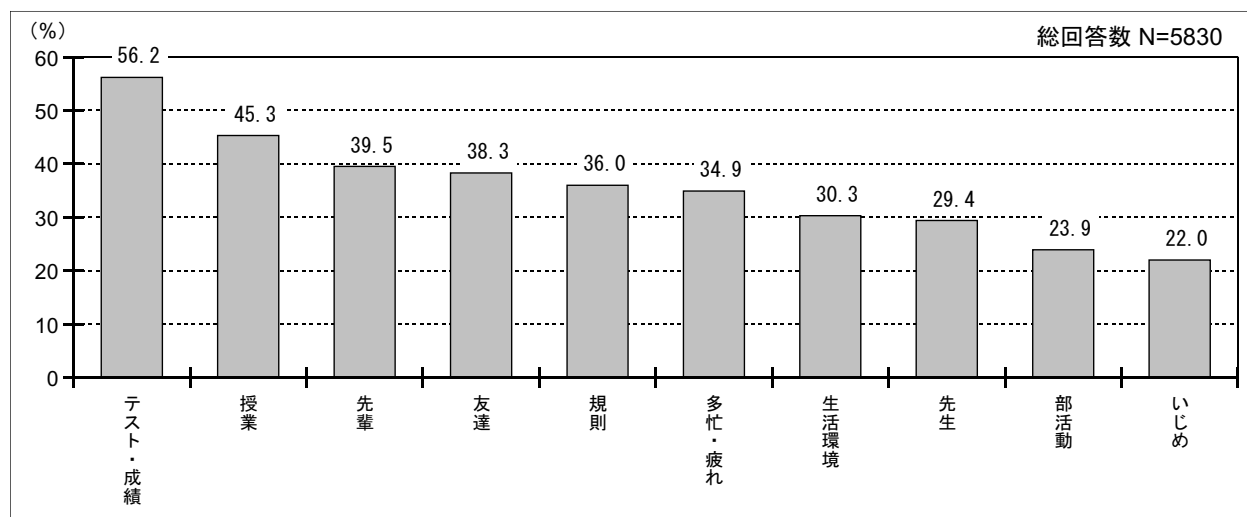


図3 リアリティショックの経験の割合（複数回答）

め、「先輩」「友達」といった人間関係に関する項目が続いた。予期不安に関する調査で一番多かった「勉強」が中学校入学後に具体になったと考えられる。一方、公立中学校生徒指導主事に行った中学校入学時における生徒の課題についての質問紙調査では、小・中学校間の接続時の課題を「新たな人間関係を構築できないこと」とであると捉えている回答が最も多かった。これらのことから、生徒は中学校教師の考えと異なり勉強に関するリアリティショックの経験が多いことが分かった。小学校時から勉強に関する不安を抱きながら入学した生徒は、その具体を中学校で知り、人間関係以上に学習面でリアリティショックを感じている。中学校での「先輩」や「友達」との関係については、小学校時から知っている友達や上級生もおり、また、互いに新たな関係を築いていくことを少しずつ進めることができる。しかし、中学校での「テスト・成績」「授業」については誰しも初めての経験であり、なおかつ中学校入学と同時に対応が求められるため、リアリティショックの経験が多いと考えられる。また、予期不安に関する調査では見られなかった「規則」と「多忙・疲れ」の経験が多いことは、中学校生活における予期していなかった戸惑いとして捉えることができる。

次に、リアリティショックの解消方法を項目別に見ると、図4のとおりで、ほとんどの項目で

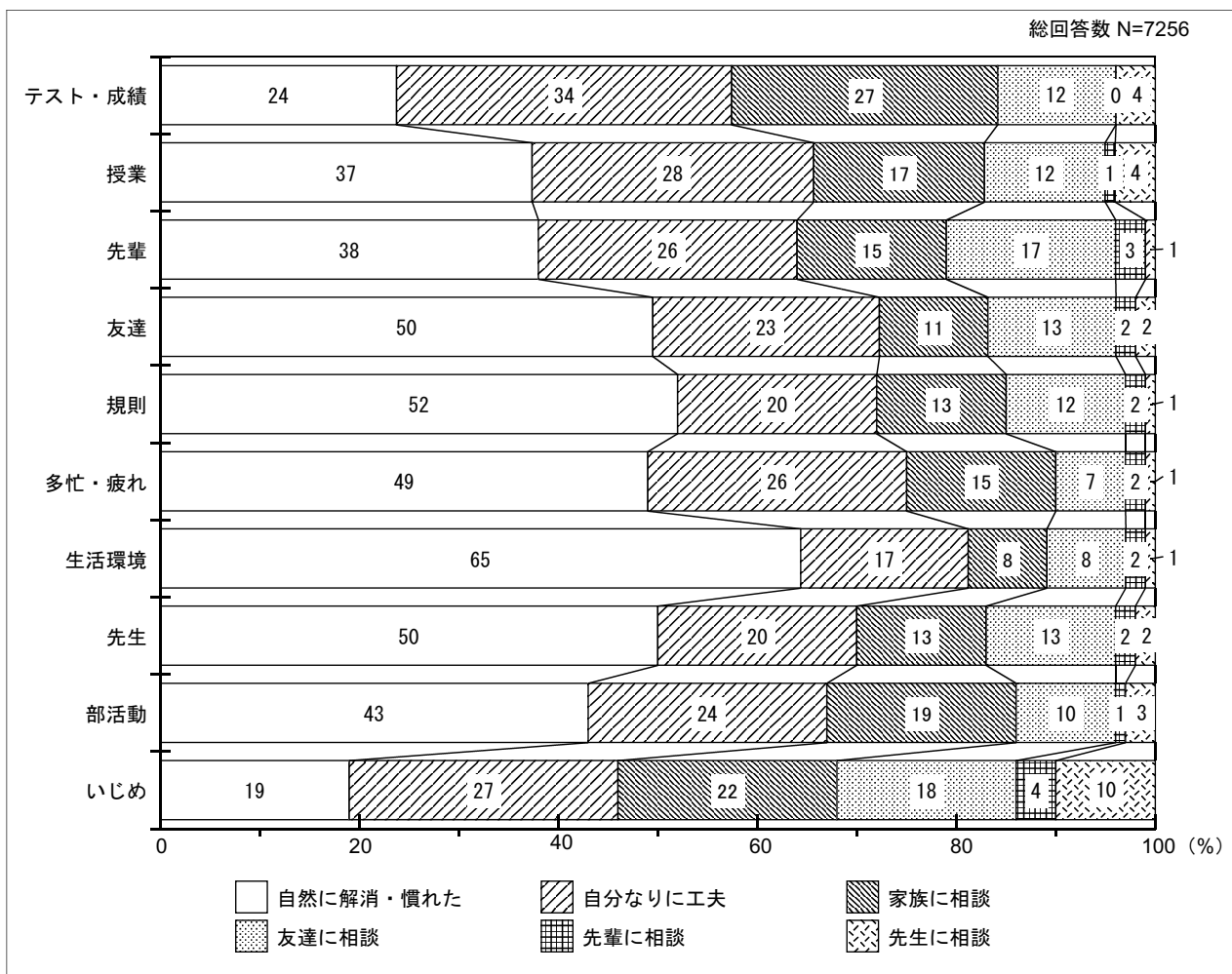


図4 リアリティショックの項目別解消方法（複数回答）

誰かに相談するよりも、時間とともに解消したり自分なりに工夫したりしている様子が見えてくる。しかし、「いじめ」の項目だけは「自然に解消・慣れた」と「自分なりに工夫」を合わせても50%を下回り、誰かに相談している割合が他の項目と比較して高かった。

相談相手の内訳を見ると、「家族に相談」と回答した割合が全体的に高く、入学時の相談相手として友達や上級生よりも、まずは家族を頼りにしている様子が見えてきた。「いじめ」については、「先生に相談」が他の項目と比べて高い割合を占めていた。

さらに、全てのリアリティショックの解消結果については図5のとおりで、「うまくいった」又は「少しくまいった」と回答した生徒が84.4%を占める一方、「うまくいかなかった」と回答した生徒は8.3%であった。「うまくいかなかった」と回答した割合が一番高い項目は「いじめ」で、次に「テスト・成績」「多忙・疲れ」であった（表8）。「いじめ」については、前述のとおり「自然に解消・慣れた」と回答した割合が最も低かった。

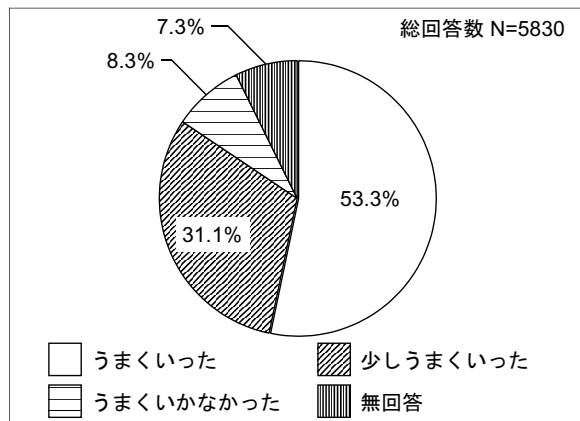


図5 リアリティショックの解消結果

これらのことから、生徒は「いじめ」に対しては自然に解消したり時間とともに慣れたりすることは少なく、解消が難しいと感じていることや、そのために家族、友達及び先生に相談して解決したいと考えていることがうかがえる。

さらに、解消結果が「うまくいった」「うまくいかなかった」と回答した生徒の解消方法を分析すると図6のようになり、「うまくいった」生徒は「自然に解消・慣れた」と回答した割合が高く、「うまくいかなかった」生徒は「自分なりに工夫」と回答した割合が高かった。また、「うまくいった」「うまくいかなかった」と回答した生徒のいずれも、相談相手は「家族に相談」と回答した割合が高かった。

表8 「うまくいかなかった」回答の割合が高い項目（上位5項目）

1位	いじめ	(16%)
2位	テスト・成績	(13%)
3位	多忙・疲れ	(10%)
4位	先輩	(8%)
5位	部活動	(7%)

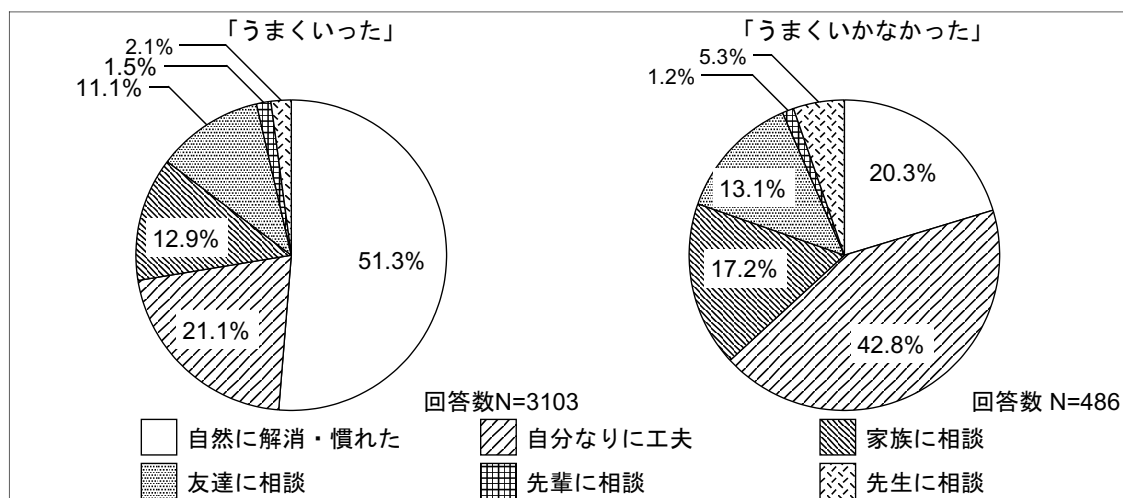


図6 「うまくいった」と「うまくいかなかった」の解消方法（複数回答）

(3) 学校適応感に関する調査の結果

学校適応感の分析では、5月と9月の両月で分析に必要なデータを得ることができた384人を対象にした。学校適応感の各因子の平均得点は図7のとおりで、5月、9月ともに「学習的適応」の得点が他の因子と比べて低かった。リアリティショックの経験の多い項目の上位を学習にすることが占めていたことから、生徒にとって学習に関する課題は5月からあったことが分か

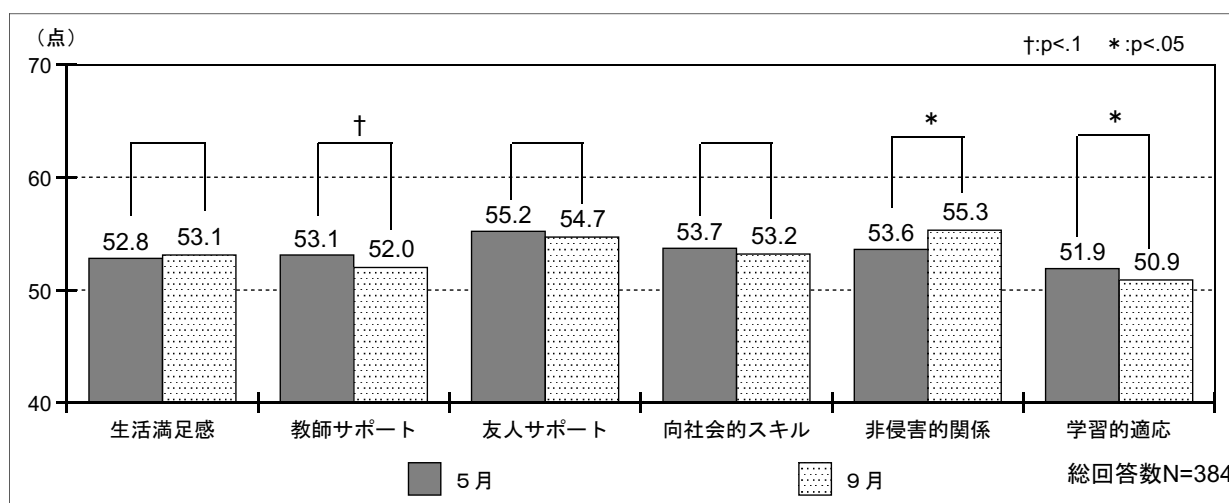


図7 学校適応感の因子別の変化（5月、9月）

る。また、5月から9月にかけての得点の変化に有意な差が見られたのは「学習的適応」と「非侵害的關係」であった。「学習的適応」は、学習の方法が分かり意欲も高いなどの学習が良好だと感じている程度を示しており、「学習的適応」の得点が減少したのは、授業で習う量やスピード、難度が増したためと考えられる。一方、「非侵害的關係」は、無視やいじわるなど拒否的、否定的な友達関係がないと感じている程度を示しており、「非侵害的關係」の得点が増加したのは、入学して半年が経ち、学級における人間関係が安定し、学級が新しい仲間と安心して過ごすことができる場になったためではないかと考える。

3 予期不安、リアリティショック及び学校適応感（5月）の関連の分析

(1) 予期不安とリアリティショックとの関連の分析

5月の質問紙調査で必要なデータを得ることができた384人のうち、予期不安に関する調査から追跡することができた153人を対象にした。リアリティショックに関する調査で「あった」又は「時々あった」と回答した割合が70%以上の生徒を上位群、30%以上70%未満の生徒を中位群、30%未満の生徒を下位群として、予期不安に関する調査における期待や不安の大きさととのクロス集計結果は表9のとおりである。表9から「期待の方が大きい」と回答した児童の69.6%がリアリティショックの経験が少ないことが分かった。また、期待や不安の大きさを「不安の方が大きい」を1点、「半分ずつ」を2点、「期待の方が大きい」を3点としてリアリティショックとの相関を見ると、相関係数 $r=-0.24$ ($p<0.01$)で、低い負の相関であった。これらのことから、予期不安が小さい方がリアリティショックの経験が少ない傾向が見られた。

表9 期待や不安の大きさとリアリティショックの経験の割合のクロス表

期待や不安の大きさ		リアリティショックの経験の割合 ^{*注}		
		上位群 (70%以上)	中位群 (30%以上70%未満)	下位群 (30%未満)
期待の方が大きい	人数(人)	1	6	16
	合計(N=23)に占める割合(%)	4.3	26.1	69.6
半分ずつ	人数(人)	14	39	54
	合計(N=107)に占める割合(%)	13.1	36.4	50.5
不安の方が大きい	人数(人)	6	12	5
	合計(N=23)に占める割合(%)	26.1	52.2	21.7

対象生徒数N=153 *注 一人当たりの総回答数に占める「あった」又は「時々あった」の回答数の割合

(2) 予期不安と学校適応感（5月）との関連の分析

学校環境適応感尺度「アセス」では、図7に示す六つの因子から多面的に学校適応感を捉えているが、本研究では、生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度を示し総合的な適応感を示す「生活満足感」因子を学校適応感の指標とした。予期不安に関する調査における期待や不安の大きさを「不安の方が大きい」を1点、「半分ずつ」を2点、「期待の方が大きい」を3点として学校適応感（5月）との相関を見ると相関係数 $r=0.24$ ($p<0.01$)で低い正の相関があることが分かった。また、「生活満足感」因子の得点が60点以上を高適応群、40点以上を適応群、40点未満を要支援群として、予期不安に関する調査における期待や不安の大きさと5月の学校適応感のクロス集計をすると表10のようになる。

表10から、5月の学校適応感が高適応群に入っている割合は、「不安の方が大きい」と回答した児童では21.7%、「期待の方が大きい」と回答した児童では52.2%となっており、期待が大きい方が5月の学校適応感が高適応になる割合が高い傾向が見られた。これらのことから、小学校第6学年で中学校生活に対する期待が大きく不安が小さければ、中学校入学後に適応がよくなる傾向が見られた。

表10 期待や不安の大きさと学校適応感（5月）のクロス表

期待や不安の大きさ		学校適応感（5月）		
		要支援群 （40点未満）	適応群 （40点以上）	高適応群 （60点以上）
期待の方が大きい	人数（人）	1	10	12
	合計（N=23）に占める割合（%）	4.3	43.5	52.2
半分ずつ	人数（人）	7	67	33
	合計（N=107）に占める割合（%）	6.5	62.6	30.8
不安の方が大きい	人数（人）	5	13	5
	合計（N=23）に占める割合（%）	21.7	56.5	21.7

対象生徒数N=153

4 学校適応感（9月），リアリティショック及びレジリエンスの関連の分析

中学校第1学年で新たに不登校になる生徒の欠席が目立ち始めるのが9月以降であることから、不登校の未然防止を考える上では9月時点で学校に適応していることが重要である。そこで、9月の学校適応感の指標となる「生活満足感」因子の得点が60点以上を高適応群、40点以上を適応群、40点未満を要支援群（図8）として、高適応群（99人）と要支援群（41人）の比較分析を行い、9月の学校適応感の高さに結び付いた要因を探った。

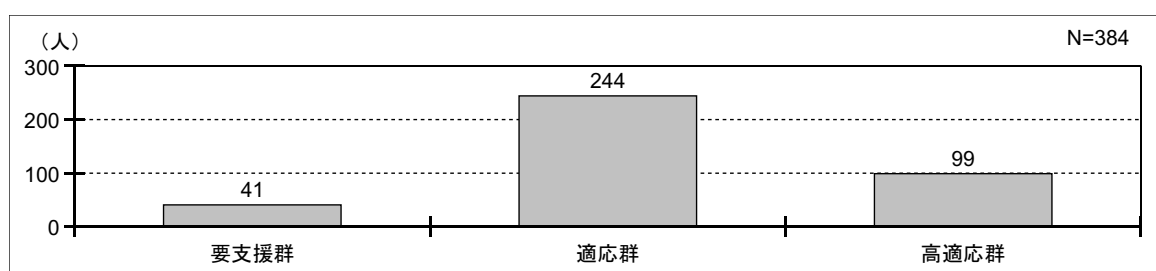


図8 学校適応感（9月）の分布

(1) 学校適応感（9月）とリアリティショックとの関連の分析

リアリティショックが、9月の学校適応感にどのような影響を与えているのかを分析した。9月の学校適応感とリアリティショックの相関を見ると相関係数 $r=-0.01$ で無相関であった。また、リアリティショックが「あった」又は「時々あった」と回答した割合が70%以上の生徒を上位群、30%以上70%未満の生徒を中位群、30%未満の生徒を下位群として、リアリティショックの経験の割合と9月の学校適応感とのクロス集計をすると表11のようになる。表11から、リアリ

表11 リアリティショックの経験の割合と9月の学校適応感のクロス表

リアリティショックの経験の割合*注		学校適応感（9月）		
		要支援群 （40点未満）	適応群 （40点以上）	高適応群 （60点以上）
上位群 （70%以上）	人数（人）	3	40	11
	合計（N=54）に占める割合（%）	5.6	74.1	20.4
中位群 （30%以上70%未満）	人数（人）	21	113	36
	合計（N=170）に占める割合（%）	12.4	66.5	21.2
下位群 （30%未満）	人数（人）	17	91	52
	合計（N=160）に占める割合（%）	10.6	56.9	32.5

対象生徒数N=384 *注 一人当たりの総回答数に占める「あった」又は「時々あった」の回答数の割合

ティショックの経験の多い生徒の20.4%が高適応群になるのに対して、リアリティショックの経験の少ない生徒の32.5%が高適応群になることが分かる。

一方、リアリティショックを項目別に要支援群と高適応群を比較した結果を図9に示す。要支援群も高適応群と同様の割合で「テスト・成績」「授業」「先輩」などの項目が上位を占めていた。

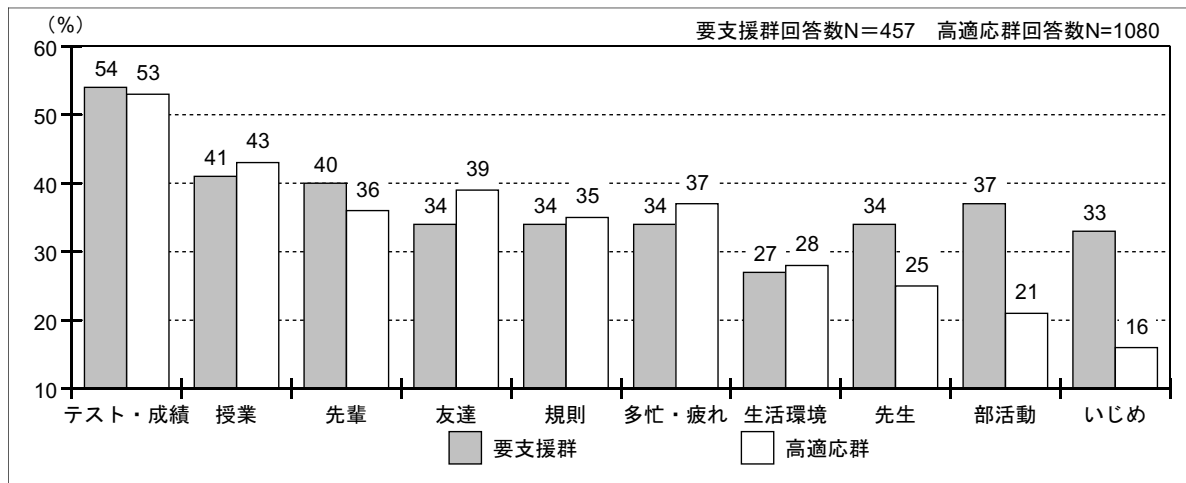


図9 リアリティショックの項目別経験の割合 (複数回答)

さらに、リアリティショックの解消結果について要支援群と高適応群を比較すると図10のとおりで、高適応群と比較して要支援群の方が「うまくいかなかった」と回答した割合が高かった。

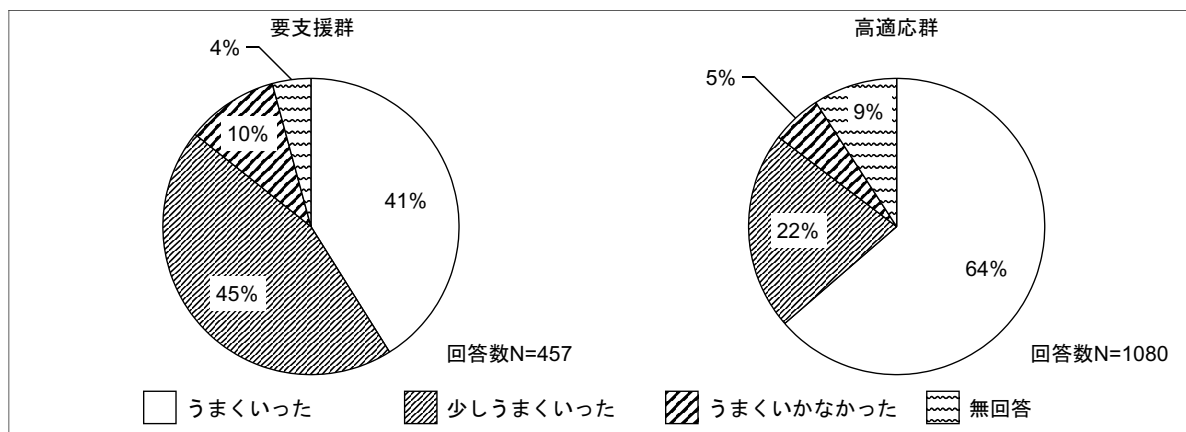


図10 リアリティショックの解消結果

要支援群が「うまくいかなかった」と回答した上位項目は、図11のとおりで「多忙・疲れ」「いじめ」「テスト・成績」「部活動」などであった。これらの結果から、リアリティショックの経験が少ない方が学校適応感が高くなる傾向は見られるものの、リアリティショックの経験の多さと学校適応感の間に明らかな相関関係を見いだすことができなかった。しかし、リアリティショックの解消結果については、高適応群の方が「うまくいった」と回答した割合が高い(図6参照)ことから、学校適応感を高めるためにはリアリティショックを解消できる力を身に付けることが必要であると思われる。

(2) 学校適応感 (9月) とレジリエンスとの分析

レジリエンスに関する調査結果を、大石・岡本 (2009) の因子分析の結果⁶⁾に従い「関係志向性」「内省性」「楽観性」「遂行性」の四つの因子に分けて高適応群と要支援群を比較した結果を図12に示す。全ての因子において、要支援群に比べ、高適応群の方がレジリエンスの平均得点

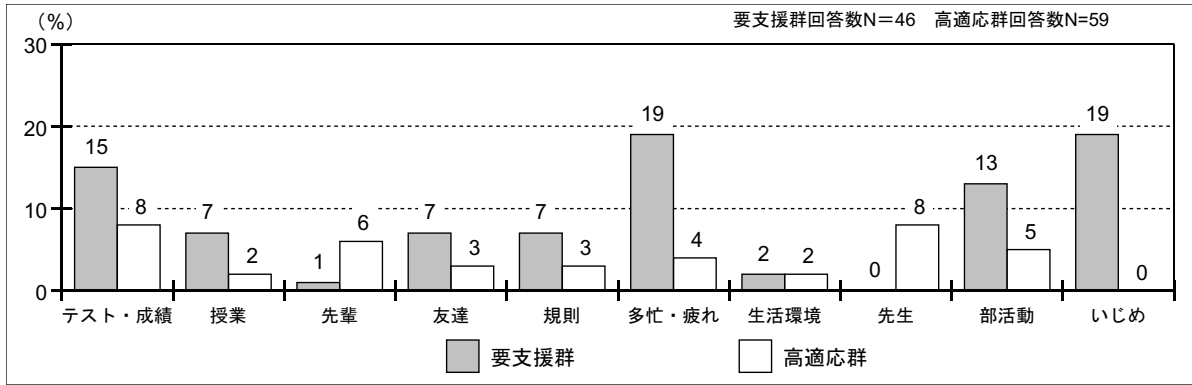


図11 「うまくいかなかった」と回答した割合 (リアリティショックの項目別解消結果) (複数回答)

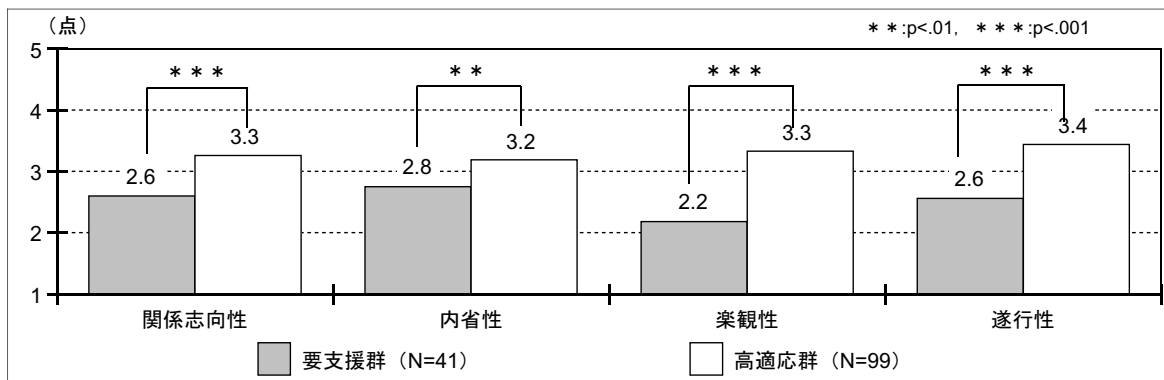


図12 レジリエンスの因子別平均得点

が有意に高いことが分かる。したがって、学校適応感を高めるためにはレジリエンスを強化することが有効であると考えられること及び要支援群において「楽観性」因子が最も低かったことから考えると、肯定的に物事を捉えることができるような柔軟な認知的態度を育むことも必要であると思われる。

5 聞き取り調査の結果

生徒に対する聞き取り調査の回答のうち、リアリティショックに関する質問紙調査との関連が特徴的である11人の回答から、9月の学校適応感の高さに結び付いた要因について検討を行う。

(1) リアリティショックの経験が多かったが、9月に高適応群である生徒の分析

リアリティショックの経験が多かった生徒のうち、9月に高適応群の生徒について学校適応感の高さに結び付いた要因を記述内容から整理すると、表12のようになる。表12から、リアリティショックの経験が多かった生徒が、9月に高適応群である要因として、リアリティショックの上位項目である「勉強」「友達」「先輩」などに関する戸惑いや驚きを乗り越えた様子が見えた。その際に、友達との関係が良好だと感じていることを示す「友人サポート」に関する記述が多かった。友達との関係はリアリティショックの上位項目であると同時に、リアリティショックを乗り越えるために必要な要因ともなっていることから、友達との関係を適切に築くことが、適応のポイントになると考えることができる。このことは、質問紙調査の分析から見えてきた「高適応群はリアリティショックの解消結果がうまくいっている」こととも一致しており、質問紙調査の結果を裏付けるものであった。

(2) 中学校入学時は要支援群だったが、9月に高適応群になった生徒の分析

中学校入学時に要支援群であった生徒のうち、9月に高適応群になった生徒について学校適応感の高さに結び付いた要因を記述内容から整理すると、表13のようになる。表13から、「学習的

表12 リアリティショックの経験が多かったが高適応群（9月）である生徒の記述内容と学校適応感の高さに結び付いた要因

記述内容	乗り越えたと考えられる項目	学校適応感の高さに結び付いた要因
仲の良い友達ができ、より楽しくなった。今では、楽しく遊んだり話したりできるようになった。〔女子〕	・ 友達	・ 友人サポート
友達がたくさんいて、話したり遊んだりするのが楽しい。勉強も大分分かりだして面白い。家でも手伝いをして祖母が喜んでいる。〔男子〕	・ 友達 ・ 勉強	・ 生活満足感 ・ 友人サポート ・ 学習的適応
体育会ではみんな協力して1位をとれ、文化発表会では本物のオーケストラの演奏を生で聴くことができた。校外学習では迷ったけど、友達と楽しく〇〇を巡ることができた。5月から学校に慣れてきたので、学校を楽しむ暇ができたと思う。〔男子〕	・ 友達	・ 生活満足感 ・ 友人サポート
部活に余裕ができ更に楽しくなった。文化祭ではピアノの伴奏、運動会ではリレーに選ばれモチベーションが上がった。〔女子〕	・ 部活動	・ 生活満足感
部活動でチームで協力して勝利した。〔男子〕	・ 部活動	・ 友人サポート
クラスに段々なじめて学校が楽しくなった。部活動の先輩方が優しくて、とても楽しくなった。〔女子〕	・ 友達 ・ 部活動	・ 生活満足感 ・ 友人サポート
いつもみんなと一緒にいることができるから毎日がとても楽しいです。それに授業で難しい問題が解けたので、すごくうれしかったです。もっともっと勉強して、難しい問題がどんどん解けたらいいなと思います。部活動では、スパイクが決まるようになったのが良かったです。いつか先輩たちみたいに上手になりたいし後輩たちを引っ張っていけるような、そんな先輩になりたいです。〔女子〕	・ 友達 ・ 勉強 ・ 部活動 ・ 先輩	・ 生活満足感 ・ 友人サポート ・ 学習的適応
学校生活に慣れて心が安定した。仲の良い友達がいる。勉強も部活も楽しくて、学校生活が充実している。〔女子〕	・ 友達 ・ 勉強 ・ 部活動	・ 生活満足感 ・ 友人サポート ・ 学習的適応

表13 要支援群（5月）から高適応群（9月）になった生徒の記述内容と学校適応感の高さに結び付いた要因

記述内容	学校適応感の高さに結び付いた要因、()内は学校適応感尺度の因子得点の変化（5月→9月）
勉強する量やテストの多さに慣れて楽しくなった。友達がたくさんできて、学校での生活が良くなった。部活動で先輩たちと仲良くできた。〔男子〕	・ 友人サポート (35→45) ・ 非侵害的關係 (49→52) ・ 学習的適応 (67→70)
部活の先輩とうまく関われるようになった。勉強が少しずつ分かるようになった。友達と安心して話し合えるようになった。〔女子〕	・ 友人サポート (59→52) ・ 非侵害的關係 (31→38) ・ 学習的適応 (43→45)
学校生活に慣れて心が安定した。仲の良い友達がいる。勉強も部活も楽しくて、学校生活が充実している。〔女子〕	・ 友人サポート (61→83) ・ 非侵害的關係 (42→44) ・ 学習的適応 (58→83)
友達が増えた。最初は自分のクラスの人だけだったが、今は他のクラスの人とも友達になった。社会の授業が楽しい。〔女子〕	・ 友人サポート (47→61) ・ 学習的適応 (30→33)

適応」「友人サポート」「非侵害的關係」に関する記述が多く見られた。また、これらの因子得点については、ほとんどの生徒が9月に上昇していた。これらのことから、リアリティショックの上位項目である「授業」「テスト・成績」「友達」や、リアリティショックの解消が難しい項目である「いじめ」を適切に解消することが、学校適応感の高さに結び付いていると考えることができる。

6 質問紙調査全体を通して見えてきたこと

予期不安に関する調査から、勉強や人間関係に関する多くの児童にとって課題になっていることが明らかになった。このことは、北海道教育委員会（2011）が行った「中学校生活に対する不安」についての調査⁷⁾とほぼ同じ結果となったが、本研究では「中学校卒業後の進路」に対する不安が児童から挙がらなかった点が異なった。これは、質問紙調査の回答方法が異なっていたことによると思われる。本研究では、児童の自由記述から予期不安の回答を得たが、北海道教育委員会の調査では、児童が該当する項目を選択する方法であった。そのため、児童が自分では意識していない「中学校卒業後の進路」について、本研究では記述がなかったものと思われる。

リアリティショックに関する調査から、勉強や人間関係に関する多くの生徒にとって課題となっていることが明らかになった。さらに、勉強や人間関係に関することのリアリティショックの解消結果を見ると、小学校の時とは大きく変わる「授業」の進め方や「友達」との関係等については、中学校入学後多くの生徒が解消していくことがうかがえた。一方、「いじめ」「テスト・成績」といったリアリティショックの解消が「うまくいかなかった」割合が高かった調査項目（表8参照）は、一部の生徒にとっては難しい課題になっていることが分かった。また、小学校で漠然としていた予期不安は中学校入学後にリアリティショックとして具体になって表れる。その際、予期不安が小さい方がリアリティショックの経験が少なく中学校入学後の学校適応感が高い傾向にあるが、リアリティショックを多く感じることは9月の学校適応感にほとんど影響を与えないことも明らかになった。そして、学校適応感が高い生徒はリアリティショックの解消を適切に行うことができおり、レジリエンスが高い。中学校入学後から9月にかけて高い学校適応感を示すようになった生徒は「友人サポート」や「学習的適応」及び「非侵害的關係」が高まっていることも明らかになった。

したがって、小学校第6学年の時点では、リアリティショックに備え、中学校生活の実際を正確に伝えるなど、漠然とした予期不安を具体的にイメージさせることにより不安の軽減を図り、現実的な期待をもたせるような働きかけをすることが中学校入学後の学校適応感を高めることにつながるのではないかと考える。特に、友達や上級生などの人間関係については、予期不安及びリアリティショックの両方で上位にありながら、中学校入学後の学校適応感が高まる要因にもなっていることから、小学校段階から横と縦の人間関係に関する不安を軽減するための支援の必要性が見えてくる。また、中学校における学習面の適応を高めるためには、既習内容の理解が欠かせない。小学校低学年から長期的な視点で学習内容の定着を図ることが必要である。さらに中学校では、入学後のガイダンスの機能を充実させ、生徒がこれから始まる学習に対して積極的な意欲をもち、主体的に活動に取り組むことができるように支援をしていくことが大切である。

IV 中学校第1学年時に新たな不登校生徒を生まないための実践プログラムの提案

前章の調査結果の分析から明らかになったことから、小・中学校間の接続時における不登校の未然防止のための支援のポイントを示す（表14）。

この支援のポイントに基づき、中学校第1学年時に新たな不登校生徒を生まないための実践プログラム「中学校生活をスムーズに始めるためのプログラム」（図13）を作成した。

表14 支援のポイント

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 予期不安を軽減し、期待を大きくもつことができるようにすること・ リアリティショックの解消を適切に行うことができるようにすること |
|--|

中学校生活をスムーズに始めるためのプログラムの構成

対象とする項目
【授業】 【テスト・成績】 【多忙・疲れ】 【部活動】 【友達】 【先輩】 【規則】 【先生】 【いじめ】 【生活環境】

小学校第6学年(1月～3月)	中学校第1学年(4月, 5月)
<p>予期不安を軽減し、期待を大きくもつことができるようにする</p> <p>1月, 2月</p> <p>中学校生活の具体的なイメージをもつことができるようにする 【規則】 【生活環境】</p> <p>教育活動の例 ○ 中学校進学に向けての説明会 【特別活動 学校行事】</p> <p>《小中連携》 ・ 中学校教師から中学校生活についての説明を聞く ・ 中学生に、中学校生活についての質問をし、それに答えてもらう</p> <p>中学校生活への期待や不安を友達と語り合うことで、相互理解を深め安心感を高める 【授業】 【テスト・成績】 【友達】 【先輩】 【いじめ】</p> <p>教育活動の例 ○ 中学校生活への期待と不安を話す活動 【特別活動 学級活動】</p> <p>〈実践例〉 ・ 「中学校生活への期待と不安を語ろう」</p> <p>2月, 3月</p> <p>自分の気持ちを上手に伝えるスキルを学び、友達との良好な関係づくりができるようにする 【友達】 【いじめ】</p> <p>教育活動の例 ○ 友達との良好な関係づくりのための学習 【特別活動 学級活動】</p> <p>〈実践例〉 ・ 「友達との良好な関係づくり - 自分の気持ちを伝えよう -」</p> <p>既習の学習内容の定着を図ることができるようにする 【授業】 【テスト・成績】</p>	<p>リアリティショックの解消を適切に行うことができるようにする</p> <p>4月</p> <p>小学校と中学校との違いを具体的に知ることで中学校生活への見通しをもつことができるようにする 【授業】 【テスト・成績】 【規則】 【生活環境】</p> <p>教育活動の例 ○ 中学校生活についてのガイダンス 【特別活動 学校行事】 【特別活動 学級活動】 【各教科の授業】</p> <p>問題解決のスキルを学び、集団生活でのトラブルに対処することができるようにする 【友達】 【いじめ】</p> <p>教育活動の例 ○ 問題解決のスキルを学ぶ活動 【特別活動 学級活動】</p> <p>〈実践例〉 ・ 「学級の良好な人間関係づくり - グループ学習を楽しく -」 〈実践例〉 ・ 「学級の良好な人間関係づくり - 安心できる学級を目指して -」</p> <p>5月</p> <p>入学後の驚きや戸惑いを上級生や友達と語り合うことで、対処法を知り安心感を高める 【多忙・疲れ】 【部活動】 【友達】 【先輩】</p> <p>教育活動の例 ○ 入学後の驚きや戸惑いを語り合う活動 【特別活動 生徒会活動】</p> <p>〈実践例〉 ・ 「中学校生活を語ろう」</p> <p>○ 自分では解消が難しいことを相談する機会をつくる 【教育相談週間】</p> <p>学習習慣を振り返り、学習面での課題を解決することができるようにする 【授業】 【テスト・成績】</p>

保護者が子どもを支えるための取り組みを進める

小学校での取り組みの例

- ・ 子どもの中学校進学前の期待や不安を知らせる
- ・ 子どもの気持ちを受容的に聞くこつを伝える

機会を捉えて行うための工夫

- * 保護者会・学級懇談・PTA活動等の学校行事の際に保護者間の交流活動等の場づくりをする
- * 学校便りやPTA新聞、学校Webページへの掲載等で伝える

中学校での取り組みの例

- ・ 子どもの戸惑いや驚きの具体を知らせる
- ・ 思春期の子どもへの理解と対応についての情報提供や研修会を開催する
- ・ 保護者同士のつながりをつくるために保護者間の関係づくりを行う

図13 中学校生活をスムーズに始めるためのプログラム

1 対象とする項目について

リアリティショックに関する調査の10項目（表6参照）を実践プログラムの対象項目にする。10項目のうち、「多忙・疲れ」と「規則」は予期不安にはなかった項目である。つまり、「多忙・疲れ」と「規則」は、中学校進学前には意識されていないが、中学校入学後に初めてリアリティショックとして意識される項目であるといえる。生徒がリアリティショックの解消を適切に行うことができるようにすることが支援のポイントとなるため、児童が事前に具体的なイメージをもつことができるように、小学校第6学年でも中学校生活における「多忙・疲れ」や「規則」のもつ意味について取り上げることにする。

10項目全てを実践プログラムとして丁寧に扱うことが望ましいが、小・中学校間の接続時という限られた期間内で実践可能なプログラムを考えると、多くの時間を割くことは難しい。したがって、集中的に短期間で扱う項目と、学校行事や学級活動等の日常の教育活動の中で長期的に教師が意識して働きかける項目とに、軽重を付ける必要がある。小学校第6学年の実践プログラムでは勉強と人間関係に関する項目の予期不安が高かったことから「授業」「テスト・成績」「友達」「先輩」「いじめ」を、中学校第1学年の実践プログラムではリアリティショックの経験が多い項目と解消が難しかった項目の「授業」「テスト・成績」「多忙・疲れ」「友達」「先輩」「規則」「いじめ」を丁寧に扱う内容とする。

2 支援について

前章の調査結果から、リアリティショックを適切に解消することが学校適応感の高まりに関係していること、学校適応感（9月）が高かった生徒のレジリエンスの得点は高いことが分かった。したがって、まずリアリティショックの解消方法、次にレジリエンスの育成について支援を探る。

(1) リアリティショックの解消方法から探る支援

リアリティショックの解消が「うまくいった」生徒の解消方法は「自然に解消」が多く、「うまくいかなかった」生徒の解消方法は「自分なりに工夫」が多かった。「うまくいかなかった」生徒は、懸案となっていることが自然に解消しないため、自分なりに工夫して解消しようとしたが、結果としてうまくいかなかった様子がうかがえる。このことから、生徒が自分で工夫すれば乗り越えることができるようになる支援があればよいと考える。例えば、ガイダンスや生徒同士の交流活動、中学校生活のしおり等で必要な情報を事前に入手できるようにすること、解決志向で肯定的に物事を捉えるという意味での楽観性を育むこと、スキル学習等により適切な人間関係を築くための方法を学ぶことができるようにすることなどが考えられる。

また、リアリティショックの解消が「うまくいかなかった」生徒の解消方法は、「自分なりに工夫」の次に「他者に相談」が多かった。「他者に相談」の中で、相談相手となるのは家族で、他の相談者（友達、先輩、先生）よりも多かった。この傾向は、リアリティショックの解消が「うまくいかなかった」生徒だけでなく、全体的に同じ傾向が見られた。中学校第1学年という発達段階から考えると、友達への相談が多いことが予想されたが、中学校入学時には家族を頼っていることがうかがえた。相談することが、直接的な問題解決につながらなくても、自分の戸惑い等を他者、とりわけ保護者に話すことの意味は大きい。したがって、保護者に子どもの理解や子どもへの上手な対応を学ぶ機会を提供するなど、保護者に子どもを支えるための啓発活動を行うことも効果的だと思われる。

(2) レジリエンスの育成から探る支援

阪根（2009）はレジリエンス育成のポイントとして、自尊感情を高めること、共感性を育てること、集団生活における軋轢^{あつれき}に対処できるコミュニケーションスキルを教えることなどを挙げ、保護者や教師などの周りの大人が介在することの大切さ、安定した家庭環境が基盤になることを述べている⁸⁾。では、学校でできる支援としてはどのようなことがあるのか、阪根の考え方を参

考に考えてみたい。

子どもの自尊感情や共感性を育てるためには、安定した家庭環境が基盤となる。もちろん、学校における教育活動で教師が直接的に子どもに働きかけることも効果的であろう。しかし何より、家庭が安心できる場であればこそ子どものエネルギーが引き出される。したがって、保護者が安心して子どもと向き合うことができるように、学校が保護者を支援することが、子どもの自尊感情や共感性を育てることにつながると考える。具体的には、思春期の子どもへの関わり方についてスクールカウンセラー等による保護者対象の講演会を実施することなどが考えられる。保護者が子どもの予期不安やリアリティショックの具体的内容、小学校とは異なる中学校の仕組みや決まり（特に「テスト・成績」「規則」）、教育相談窓口の存在などについて、子どもとともに説明を受け、理解を深めておくことの意義は大きい。

集団生活の軌轢に対処できるスキルとしては、聞くスキル、主張できるスキル、問題を解決できるスキルなどが大切である。これらのスキルを育てるためには、家庭生活でのコミュニケーションの場を豊かにするとともに、学校という集団生活の場でスキルを身に付けることができるような支援を行うことが求められる。

本研究における調査の結果、学校適応感（9月）が低かった生徒のレジリエンスの四つの因子（「関係志向性」「内省性」「楽観性」「遂行性」）の得点は、学校適応感（9月）が高かった生徒に比べいずれも低かった。特に学校適応感（9月）が低かった生徒は「楽観性」の因子が低かったことから、実践プログラムでは否定的な感情も語りやすい場面を設定し、自己開示を促しながら、仲間も同じようなことで悩んでいたりと、多くの生徒が戸惑っていたりすることにも気付かせ、一人で問題を抱え込んで悩まないように、柔軟な思考や態度を培うような支援を行うことが必要である。

3 実践プログラムの提案

(1) 小学校第6学年対象実践プログラムについて

小学校では、特に「授業」「テスト・成績」「友達」「先輩」「いじめ」に対する正確な認識をもつことができるようにすることで予期不安を軽減し、期待につなげるようにする支援を丁寧に行う必要がある。「テスト・成績」「授業」といった勉強に関することについては、中学校での勉強が難しいことへの予期不安が高いこと、中学校入学後も「テスト・成績」に対する戸惑いを解消しにくいことから、小学校までの学習内容の定着を図ることが求められる。中学校入学後、生徒にとって新しい名称の教科があったり、授業の進め方が変わったりすることもあるが、それらに対するリアリティショックは、中学校入学後の早い時期に解消する割合が高かった。したがって、新しい名称の教科の内容や授業の進め方などのシステム上の変化については、中学校入学説明会で情報を提供するとともに、中学校入学後に丁寧なガイダンスをすることで対応できるのではないかと考える。『中学校学習指導要領』（2008、文部科学省）「総則」においても、生徒が学校や学級での生活によりよく適応することができるように、学校の教育活動全体を通じてガイダンスの機能の充実を図ることが示されている⁹⁾。

「友達」「先輩」「いじめ」といった人間関係に対する不安については、集団生活における軌轢に対処するためのコミュニケーションスキルの学習を行い、スキルを身に付ける支援を通して不安を軽減するとともに、新しい人間関係への期待につなげることが大切であると考えられる。具体的には、聞くスキル、主張するスキルを中心としたスキル学習を行う。また、予期不安を語り合う活動を通して、全体的な予期不安の軽減を図ることができるようにする。さらに、中学校入学説明会において中学生から直接話を聞くことも予期不安の軽減という点では有効であると考えられる。

保護者に対しては、中学校入学説明会の時に、予期不安、リアリティショックの具体を知らせ、家庭で子どもと一緒に話し合うことの大切さを伝えることが有効であると考えられる。

(2) 中学校第1学年対象実践プログラムについて

中学校では、「授業」「テスト・成績」「多忙・疲れ」「友達」「先輩」「規則」「いじめ」に対するリアリティショックを適切に解消することができるようにするための支援を丁寧に行う。まずは、中学校入学時のガイダンスで中学校生活についての情報や「規則」を分かりやすく知らせるとともに、対処法を具体的に示すことが必要である。特に「授業」「テスト・成績」については、小学校とは大きく異なる項目である。授業の受け方、提出物についての約束事、勉強の仕方などについて各教科の最初の時間に丁寧に教えるなど、小学校からの円滑な接続ができるようにするとともに、3年間の学習の見通しをもつことができるようにすることが重要である。

「多忙・疲れ」については、実際に忙しく疲れている状況もあると思われるが、生徒の受け止め方により多忙感として意識されていることも考えられる。実際に忙しい状況については、スケジュール管理を促して見通しをもつことができるようにする。多忙感については、学級担任等との個別の教育相談やリアリティショックを語り合う学級活動等の場づくりを行い、生徒が忙しい状況や疲れていてつらいという気持ちを聞いてもらうことができるようにする。「いじめ」については、文部科学省(2006)が定義⁹⁾しているように、同一集団内で何らかの人間関係のある者の間で発生する。また、「いじめ」は学級内で多く発生することが指摘されているため¹⁰⁾、小学校の学習に続く形で問題解決のスキル学習を行い、学級内で起こることが予想されるトラブルに対処することができるようにする。

保護者に対しては、中学校入学説明会や入学式、年度当初の学級懇談会やPTA総会等の機会を捉えて、保護者が子どもにとっての一番の相談相手であることをなるべく早い時期に伝えるとともに、中学校生活についての説明会や子どもの理解と対応等をテーマにした研修会を行い、啓発を図る。

V おわりに

本研究においては、小学校第6学年児童から予期不安の具体についての調査、中学校第1学年生徒からリアリティショックの具体と解消方法及び解消結果についての調査、また学校適応感とレジリエンスに関する調査、聞き取り調査を併せて行い、それぞれの関連の分析を通して、小・中学校間の接続時における不登校の未然防止に有効な支援を探った。本研究で明らかになった中学校第1学年不登校の未然防止に有効であると考えられる支援は決して目新しいものではなかった。しかし、入学前に何を不安に思い、入学後に何に戸惑い、どのようにして解消したのかを児童生徒に直接確認し、既に多くの学校で行われている支援が有効であることを明らかにしたことに意義があると考えられる。これまでスムーズな小・中学校間の接続のために行われてきた多くの支援の重要性が再確認できた。また、改めて学習支援と良好な人間関係づくりの支援、保護者に対する啓発の大切さが明らかになった。何より、小・中学校間の接続時における不登校の未然防止の支援のポイントを、子どもたちの声を通じて具体的につかむことができたことが成果である。特に、中学校進学前の予期不安や中学校入学後のリアリティショックとして、「勉強」「テスト・成績」「授業」などの学習に関わることが子どもたちから具体的に最も多く挙げられていた。これらのことは、子どもたちが学習に関わる支援を求めているということでもある。したがって、スムーズな小・中学校間の接続のためには、本研究で提案したような短期間のプログラムに加え、小学校低学年から長期的な視点で学習内容の定着を図る意図的、継続的な取り組みを行い、中学校入学後の早い時期から学習内容の理解のための支援を行うことが必要である。

本研究において提案した実践プログラム「中学校生活をスムーズに始めるためのプログラム」が、中学校第1学年時の不登校の未然防止の一助となれば幸いである。今後はこの実践プログラムを実施し、その有効性を検証することが課題である。

* 報告した回答の内容は個人情報に配慮し記載しておりますが、取り扱いには十分留意してくださるようお願いいたします。

○参考文献

- 1) 文部科学省 (2012) 『平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」』
- 2) 新潟県教育委員会 (2007) 『中1ギャップ解消に向けて—中1ギャップ解消プログラム—』
- 3) 阪根健二 (2009) 「レジリエンスを高めるポイント」, 『児童心理 4月号第63巻第5号』金子書房
- 4) 栗原慎二・井上弥 (2011) 『アセス (学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト) の使い方・活かし方』ほんの森出版
- 5) 大石郁美・岡本祐子 (2009) 『青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連』広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター
- 6) 前掲書5)
- 7) 北海道教育委員会 (2011) 『「中1ギャップ問題未然防止事業」—中間報告書—』
- 8) 前掲書3)
- 9) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領』
- 10) 森田洋司 (1998) 『児童生徒のいじめの生成メカニズムとその対応に関する総合的研究』

○統計解析ソフトウェア等

- ア) 評価分析システム TRUSTIA®/R.2 株式会社ジャストシステム

○Webページ

- イ) 文部科学省：いじめの定義
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/07/18/1304156_01.pdf)

平成23・24年度岡山県総合教育センター所員研究
(共同研究；生徒指導)
「不登校の未然防止に関する調査研究 ―中学校入学前後の
予期不安，リアリティショックに焦点を当てて―」
研究委員会

指導助言者

新井 肇 兵庫教育大学大学院教授

協力校（平成24年度）

津山市立林田小学校，鶴山小学校，高倉小学校，中道中学校
笠岡市立笠岡小学校，大井小学校，今井小学校，笠岡西中学校
真庭市立勝山小学校，月田小学校，富原小学校，勝山中学校

協力委員（平成23年度）

石田 玲子 吉備中央町立上竹荘小学校教頭
美若 知美 津山市立西小学校指導教諭
橋本 淑子 津山市立津山西中学校養護教諭
田中 義昭 笠岡市立大井小学校教諭
佐藤 哲治 笠岡市立笠岡西中学校教諭
(現 笠岡市立北木中学校教諭)

植田 隆之 真庭市立勝山小学校教諭
山乗富美子 真庭市立勝山中学校養護教諭

研究委員

常本 直史 岡山県総合教育センター生徒指導部長（平成23年度）
(現 岡山県立落合・久世・真庭高等学校長)
野崎 誠二 岡山県総合教育センター生徒指導部長（平成24年度）
田坂 紀子 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事
高橋 典久 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成23年度）
(現 岡山県教育庁指導課生徒指導推進室指導主事（主幹）)
岡本 邦尚 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成24年度）
塚崎智代美 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事
赤木陽一郎 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（主幹）（平成24年度）
松末 昌樹 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（主任）（平成24年度）

平成25年2月発行

岡山県総合教育センター 研究紀要 第6号

研究番号12-05

不登校の未然防止に関する調査研究 ―中学校入学前後の予期不安，リアリティショックに焦点を当てて―

編集兼発行所 岡山県総合教育センター

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11

TEL (0866)56-9101 FAX (0866)56-9121

URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>

E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.lg.jp